

# 博学と謙虚と真摯 そして真の紳士だった先生

佐藤 克 廣

北海学園大学法学部教授

十亀昭雄先生の突然の訃報に接し、十亀先生の二代あとの北海道地方自治研究所理事長としては、北海道地方自治研究所としての公式メッセージを書かなければならない義務感に駆られるところです。十亀先生は、一九六八年の社団法人北海道地方自治研究所設立時から理事となられ、一九八三年に副理事長、一九九二年～二〇〇一年には理事長を歴任されました。その後、顧問として、現在は公益社団法人となっている北海道地方自治研究所に多大な貢献をなされました。

しかしながら、私にとって、十亀先生は、そのような公式の役目とは別の出会いと親交の感慨のある先生でもあり、むしろそちらの方が個人的には重要です。

十亀先生との出会いは、私が北海道に来た一九八一年か翌年であろうと思います。その後のおつきあいが長いので、いつ最初にお目にかかったのか記憶が定かではありません。最初の印象は、活動的で鋭い感覚をお持ちの方だと、生意気にも思ったことを覚えています。それほど能力もないのに、生意気さ加減だけは一人前だった私は、その後も十亀先生には扱いにくい奴だったのではないかと、馬齢を重ねたいまなら反省しきりです。

もちろん、十亀先生の北海道の政治や行政に関する分析、評論に

は感服しておりました。データに基づいたしつかりとした分析と、しかし、一方で北海道をこよなく愛した批判的論評は、当時の若い私にもひしひしと伝わってきました。また、北海道に住むということとは、先生のようなひたむきさと情熱を兼ね備えることを意味するのだと、無言のうちに教えていただいたと思っております。

十亀先生と親しくお話しを交えることができるようになったのは、北海道地方自治研究所というよりは、札幌都市研究センターでのつながりだったと思います。札幌都市研究センター設立の段階でお声をかけていただきました。しかし、当時は、研究・教育と社会活動とのバランスをどうとれば良いのか、暗中模索といえれば格好がよいのですが、さっぱりわからない時期であり、深く関わることなく一般会員として関わる程度でした。その後は、札幌都市研究センターの理事にしていたいただき、十亀理事長のもとで、札幌市や周辺市町村のことについて、たくさんのお話を学ぶことができました。

大学院をたばかりで、しかも、フィールド研究の経験もなく、単なる中途半端な頭でっかちだった私には、十亀先生や荒木俊夫先生、山本佐門先生のように地元を愛し、愛するが故に厳しく批判する先生方は、非常に新鮮でした。残念ながらそうした先生方の片鱗にさえ、若い時分の私には十分気づくことができませんでした。札幌

幌に長く暮らすことになり、いつの間にか人生で一番長い期間をこの地で過ごすことになった私にとって、札幌や北海道は「故郷」ともいうべきところになってきました。それにつれて、十亀先生らの思いが、及ばずながら、少しずつわかってきたように思います。

十亀先生は、温厚でまじめな方でした。私のようなやんちゃな者に対しても、怒りもなく真摯に対応しようとなさる方でした。けっしてご自身の博学をご自慢なさることもなく、若いものの意見にも真摯に耳を傾け、何かしら学ぶことはないかと考えていらつしやるように見えました。私は、いつもそういった先生の温厚さとまじめさに甘んじていたように思います。札幌都市研究センターでの研究会でも、乱暴な私の意見にいつもやんわりと、しかし、適切に問題の本質を突いたコメントをいただいていた記憶があります。先生のやんわりとはあるものの、鋭い指摘に、自分自身の甘い、中途半端な意見の披瀝が恥ずかしく赤面することもしばしばでした。

その後、先生は、一九九三年に北海学園大学法学部にいらつしやることになり、同僚として七年間ほど接していただけることになりました。真駒内のご自宅から、よく自転車通勤されておられました。聞くとは北海道教育大学時代も自転車通勤されていたとのこと。北海学園大学に通うよりおそらく三倍近い距離を自転車通勤通つておられた先生には、逆に物足りない距離であったかもしれません。何事にもまじめに取り組まれる先生は、マラソンや自転車にも、学問と同程度に真摯な態度で取り組んでおられたように見えました。無精な私には、その点でもまぶしい先生でした。

しかしながら、生来生意気な私は、あるとき、「民主主義を標榜する政治学者が漫然と元号を使つて語るのはおかしい」などと、ず

いぶんと直截な批判を先生に向かつてしたこともあります。十亀先生は一瞬驚いた顔をみせました。しかし、決して怒りの表情は浮かべず、むしろ寂しそうにご自身の育つた時代の空気が染みついてしまつていると反省したようなコメントをいただき、しまった、触れてはいけないことを言つてしまつたかと思ひました。自分自身がそうだからといって、他人の状況を勘案せずにその価値観を押しつけてはいけないのだと、その時の十亀先生は教えてくれたと思ひました。

考えてみれば、私が最初に十亀先生にお目にかかつたときの先生の年齢を私自身が数年以上超えてしまつています。しかし、私自身は若い人たちに、十亀先生ほど優しく、そして彼・彼女たちに十亀先生ほど深い示唆を与えられるようなものになつてはいないことに気づき愕然としてしまいます。

また、たとえば札幌市の市民アンケート調査など、いろいろなデータに接し、その解釈が難しい場面で、十亀先生がお元気であれば、「どう見たら、どう考えたら良いのでしょうか」と教えていただきたいと思うことがたくさんあります。十亀先生の読書量の足下にも及ばない私は、先生がご存命でお元気であれば、先生のお話を伺つていただけでも幸せでした。ここ何年か聲咳（けいがい）に接する機会もなく、残念でした。

十亀先生のつくつた伝統は、北海道自治研究所でも、うまく引き継いでいかなければならないという思いをさらに強くしています。草葉の陰からどうか見守つてください。先生にいただいたご恩は、私にとって決して忘れることのないものとなるでしょう。

ご冥福をお祈りいたします。